



Fグループ会報



大学音楽学部の将来に向けて

学院長・理事長
中島省吾

Fグループの皆さんにとって、母校のこの10年間の変わりようは、かなり目まぐるしいものだったでしょう。1951(昭和26)年の短期大学音楽科の発足から30数年の間に、三宅洋一郎先生が云われる「小さい学校」もかなり大きくなり、内容も充実して、フェリスの短期大学音楽科は多くの業績を重ね、立派な卒業生たちを送り出してきました。しかし、4年制大学音楽学部への発展的改組、施設・機器等の整備、カリキュラム・教授陣の充実、コンサートや公開プログラム等の活発な展開など、いろいろの侧面で、フェリス女学院の音楽高等教育は近年目覚ましく変貌したと云っても過言ではないと思います。

これらが実現したのは、モルトン先生、林貞子先生以来培ってきた基礎に三宅先生らが築いてこられた伝統が開花結実し、佐藤馨元学長、田中順元科長らを中心とする関係教職員の大変なご苦労、Fグループを中心とする同窓生各位のご支援などによったものですが、Soli Deo Gloria(ただ神にのみ栄光あれ)の祈りに集約される私たちの志を主か祝福して下さったといえましょう。

大学音楽学部の発足以来の歩みは恵まれて順調であったようです。しかし、その路には、学部長はじめ非常勤の方を含む多くの教職員の奮苦心・御尽力があつたことは云うまでもなく、先生方の教育への熱情に学生たちが良く応えてきたのだと思います。規模が小さいことを活かした触れ合いの教育、伝統的なきびしい修練、そして、それらを貫く宗教的な敬意、また、文学部との相互啓発が、一層特色ある教育・研修環境を今後つくりあげていくものと期待しています。

そして、規模が小さく、質が良い教育を目指す学校が突き当たる壁が財政であることは今のフェリス女学院にもあてはまります。とくに、施設・器具などの充実・更新のための資金を少ない学生数のもとでどうやってつくるかは、今後中長期的に当女学院が抱えづけていく問題です。かつてのフェリスをこの面で支えてくれたのは、米国改革派教会の信徒たちの献金でした。今、当学院では、中学・高校も大学もこそって、維持協力会という組織で、かつてのミッション・ボードに代わる財政的支援の体制をつくりあげようとしています。

この維持協力会が目指しているのは、一度に多額の資金をあつめるということではなく、出来るだけ多くの協力者に持続的にご支援頂ける中期・長期的な、幅広い後援体制を確立することです。Fグループの皆さんから出来るだけ多くの方がご参加下さるように祈り願っております。



「ごあいさつ」

Fグループ会長
大島君子(3回)

先頃私は、熊本県主催のアフターファイブ・コンサートに出演しました。文字通り午後5時半開演、場所は緑のむせかえる熊本県庁前庭の仮設ステージ、お勤め帰りの人々や近所の方達が音楽に立ち寄って聴いて下さるオープンなコンサートで、ピアノソロに、地元で活躍中の若い演奏家達との即席アンサンブルを交えたプログラムでした。夕刻とはいえた日の長い南国の7月初旬のこと、ま

だ暑い太陽が燐々と照りつける客席は、立ったままの方々も含めて300人を越す盛況で、最後まで熱を込めて聴いて下さって楽しい会になりました。翌日私は横浜へ戻る機中で、金色に輝く美しい雲を眺めながらこの興奮を思い返して考えました。このコンサートのように、いわゆるクラシック音楽を私達は日常の中でもっともっと楽しむべきではないかと。

その一音一音の響きに心を砕き、フレーズを考えて曲の構成をまとめ、演奏会となれば会場や楽器の善し悪しに気を遣って、納得の行くまで完璧に近付ける、それこそが音楽であり芸術であるとするのはまさしく正論であります。一流の料亭で腕に自慢の板前さんが、素材の吟味から始まって長時間丹念に味付けした宝石のようなお料理を名店のお器に盛り付けて、数寄造りのお座敷でじっくり味わう、これは食文化の一つの頂点です。しかし、家庭や町角のお店で手軽な材料で温くこしらえた“おでん”を、ふうふう言いながら食べるのも、欠くことのできない食文化の楽しみです。ただし“おでん”もおいしく作る為には愛情こめて丁寧に煮込まなければなりませんが、熊本の演奏会は、このおいしいおでん式コンサートでした。

Fグループの皆様もこの様な場でたくさん御活躍でしょうし、近頃はクラス会を、同期の仲間のジョイント・コン

サートの形で聞くお話をよく聞くようになりました。これはとても素晴らしいことで、前述の意味で大いに声援を送ります。

又仕事、主婦業、育児などでしばらく演奏することから遠ざかっているとして、今更とも――と思っている方がおありでしたら、理想とは少々隔りがあっても難しいことを言わずに、気楽に楽器の蓋を開けてごらんになりませんか。何才になってもレッスンを受ける緊張と喜びは格別ですし、自分で演奏することは、少し古い表現ですが「音楽を10倍楽しむ方法」の筆頭です。そして心身共に健康でいる為の良薬でもあります。ここに音楽の一つの真価があることを私達はフェリスで教えられたのではないでしょうか。

フェリスはその少数教育の理想を貫く為に、現在経営的大変苦心をされている由です。中島省吾学院長のお言葉にその主旨がある通り、「フェリス維持協力会」がスタートすることになり、近日中に学校から詳しい御案内がお手許に配布されます。「母校創立の精神を尊重し、その発展を期すること目的とする」とFグループ会則の最初に記されています。フェリスがいつも元気で、立派な大学である為によろしく御協力下さいませ。

皆様も音楽と楽しく付合われて、いつもお元気でいらっしゃることを願って止みません。

1995年度 Fグループ総会及び研修会報告

プログラム

6月11日 PM 1:00~

於：山手ゲーテ座

司会：吉川慶子

総会

1. 開会の辞 吉川慶子
2. 会長挨拶 大島君子
3. 会計報告 齊藤令子
4. 会計監査報告 中島恭子
5. 退任の先生挨拶 江口元子先生
為本章子先生
6. 中島省吾 学院長挨拶

研修会 (PM 2:15~3:30)

渡邊明先生

1. バリトン独唱
2. お話：この頃思うこと（音楽と心）
宮城令子先生
1. ピアノ独奏
2. お話：フランス音楽（色彩と表現）

総会

7. 岡島雅興先生挨拶
8. 村井範子先生挨拶
9. 宮本とも子先生挨拶
10. 秋間陽先生挨拶
11. 支部報告 北支部 工藤羊子
中部支部 牛込まり
関西支部 平田孝子
九州支部 伊藤和子
12. 新卒業生紹介
13. 役員紹介
14. 賛美歌、校歌合唱
15. 閉会の辞 中田幸子 59名出席

今年度の同窓会総会は、去る6月11日(日)山手ゲーテ座にて行われました。今回は例年と趣向を変え、より多くの方に参加していただきたいという思いから、Fグループ研修会をはさんだ形となりました。

最初に大島会長から、三宅洋一郎先生、塙原瑛子先生、大宮真琴先生の訃報が伝えられました。先生方の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

又、1月の阪神大震災では、昨年発足したばかりの関西支部の方が、被害の大きかった地域の同窓生の安否を

全員確認して下さったというお話をもてて、目立たない部分での結びつきが全体を支えている事を実感し、感激致しました。

次に、今春学校を退任されました江口元子先生、為本章子先生の御紹介がありました。江口先生は、音楽科では初めピアノを勉強していたけれど、三宅春惠先生に憧れて声楽を勉強するようになった事。For Others のモットーを心に、いつでもフェリスを愛している。というスピーチをされました。

為本先生は、この学校に居る間に他の先生から沢山の刺激を受けた事。又、生徒からも、オリジナリティーや洞察力を感じる事ができた。現在、女性が才能をのばしやすい環境になってきている。昨日より今日、今日より明日と、音楽の素晴らしさをわかっていけるとよい。と、坦白とした語り口の中に、音楽への情熱を感じました。

中島省吾学院長より、学院の様子と、この程設立された維持協力会について詳しい御説明をいただいてから、渡邊明先生による研修会に移りました。

先ず、渡邊先生の独唱で、箕作秋吉作曲の「芭蕉紀行集」を聴かせていただき、余韻の消えぬうちに、この頃思うこと～音楽と心～と題してお話を始めました。(内容につきましては、7月1日発行のエビストラを御参照下さい。)

引き続き、奥様の宮城令子先生が印象派のピアノ曲を3曲演奏されました。

その後の総会では、大学の先生方が次々と御挨拶下さいり、岡島雅興先生からは、校舎が山手と緑園に分かれているので、先生と生徒とは以前より接点が少なくなってしまったけれど、文学部と音楽学部は交流の機会が多いとの事。秋間陽先生、新任の宮本とも子先生も出席して下さり、賑やかな総会となりました。先生方の御協力に心より感謝申し上げます。



追悼

～天に召された先生方を偲んで～

Gesangvoll, mit innigster Empfindung
きわめて奥深い想いをこめて
充分に歌わせて
(L.v. Beethoven Sonata Op. 109より)

吉田 雅子 (15回)

忘れない猛暑の中、ことばでは言い尽くせないほど恩になった三宅洋一郎先生をお見送りしてから一年が過ぎました。お知らせを頂いて私は学生時代のひとコマを思い出していました。ある日クラス授業のため教室に入っていた先生は何か沈んだ面持ちでしばらく無言でいらっしゃいました。「ぼくのピアノの先生が亡くなられた……」そしてロシア出身のレオ・シロタ先生についていろいろ話して下さったのですが、20才そこそくだった私はまだ人生の深いところがわかるはずもなく、先生のお気持はお察しできるものどう反応してよいのかただ無言でいるよりほかなかったのがなぜか鮮明に思い出されました。そしていま、フェリスで先生のお教を受けた方々の中にはこの時の先生と同じ思いでいらっしゃる方も多いのではないでしょうか。

先生の授業、レッスンは毎回知的な刺激にあふれた充実したものでした。最も大切なのは何よりもその人の内奥から出てくる歌心だったと思います。「自分が要求しないところに音楽があるはずがない」とよくおしゃいました。ひとりひとりの感性、表現を尊重して下さったのですが、一方ではその表現は知識や教養、つまり正当な様式、形式感をはじめとする周到な考察にしっかり支えられたものでなければならない。そこから表出されるものがその人の音楽性であり、その手段がテクニックであるというのが先生が私達に理解させようとなさったことだと思います。先生はこれらのことと固いことばや強制ではなく、自然のうちにこちらの好奇心を育み、時には觸られたりして私達の中に植えつけられたのでした。楽曲には豊かな想像力をもってつきあうこと、読譜は推理小説のように謎を解いてゆく楽しみであることなど学ぶ者の自発的なアプローチを望んでいらっしゃいました。

私達が学んだのは後に「トリ小屋」と呼ばれる事になる石段の途中にある木造校舎でした。小さな部屋にアップライトピアノがやっと一台、防音はおろかエアコンもない、全部の部屋の音が聴こえるところでしたがそれを不満に思う人は誰もいませんでした。決して理想とはいえない条件のなかで充実感があったのは先生が愛情を持って、そして忍耐を持って見守って下さっていたからではないでしょうか。先生のソロ演奏は残念ながらうかがったことはないのですが、レッスンの時はよく弾いてみて下さっさものです。その音色はいわゆる「大人の音」で深く美しくニュアンスに富んでいて聴き入るばかりでした。お弾きになりながらついお歌いになるお声は印象的でした。屹立声と申しあげては失礼ですが独特でした。きっと音符の向う側のものまで全部「音」になさりたかったお気持のあらわれだったのかもしれません。

ある時ピアノを教える秘訣をおたずねしたら先生は「その生徒の良いところを見つけること、悪いところを直そうとするより良いところを伸ばしてあげること、そうすれば悪いところはかくれるよ」とおしゃって下さいました。今になるとこのおことばは社会の中で不器用な人づきあいしか出来ない私を見通しての御注意が含まれていたように思われています。

先生はまた音楽を学ぶ、ピアノを弾くということは生涯にわたるものであるというお考えを強く持っていました。超多忙の中から卒業した人達が勉強を続けられるようにたくさんのチャンスを作っていました。卒業生の活動は本人ばかりでなく母校を支え、又母校の存在は卒業生を支えるものです。もうずっと昔に短大音楽科の存続が重大な危機にさらされたことがあったと聞いています。先生は音楽科の教育の証しとして卒業生が活発に音楽活動することを望まれました。それは次にフェリスで学ぶ事を志望する人達が増えることにつながりそれによって音楽科の存在の必要性もあらためて認知されるとお考えになっていらしたのでしょう。危機

も乗り越えられて以来卒業生のために、音楽科の発展のためにしてフェリスのために勢力的にお働きになられ、そして今日の発展を遂げたフェリスを御観になって先生のお心に去來したものはどんなことだったでしょう。うかがえなかったのが残念です。

先生が私達に与えて下さったものを思い返し気持ちいっぱいの感謝を申しあげると共に、信念としていらした「内から歌う」ことに励んでゆきたいと思います。

塙原瑛子先生の思い出

田口 純子 (24回)

昨年12月1日未明、塙原瑛子先生は享年68才でお亡くなりになりました。昨夏にはかなり体調を崩されて9月に入院なさり、精密検査などを受けになられたのですが、特にお悪い所はないという事で、少しお元気になられて10月末には退院なさったと伺い、少し安心致しております矢先に突然の御訃報。今だにとても信じられず、茅ヶ崎のお宅に伺えば今でも熱心にレッスンなさっているらしさるような気がしてなりません。

私は小学2年生の時から塙原先生のお宅にレッスンに通い始めましたが、茅ヶ崎の駅を降りて沙のかおりの漂う松林を過ぎ、海に向かう少し砂地の路地を入ると、垣根にえにしだの黄色い花が揺れてい、先生のお宅の玄関にはいつもいい薫りの色とりどりのバラやフリージアなどの美しいお花が活けてあり、前の方のレッスンの合間を伺って少し緊張しながら、そっとノックをしてレッスン室へ入ったことが、今でも鮮やかに記憶に蘇ります。

塙原先生は正しい姿勢と理想的な手の構えで、身体のどこにも無駄な力を入れずに自然に弾くことが出来るようになるため、細やかな注意の行き届いたレッスンをなさってくださいました。私がフェリス卒業後、渡仏してパリ国立高等音楽院で学び始めましてからも、テクニック面でやり直しをさせられたりもせず、少しも困らないで音楽の勉強ができましたのも、この自然な奏法のお教のお蔭と深く感謝致しております。

また先生は「響きをよく聴きなさい。」「美しい響きを削りなさい。」と常々おしゃっておられましたが、固くてきたない叩いたような音を大変嫌われて、強くても幅のある響きの豊かなフォルチ、弱くても心に深く染み入るようなピアノの響きを望んでいらっしゃいました。また速いバッセージでも指を動かすことに気をとられてたりすると、少しテンポを落として丁寧によく表情をつけて自分の出している音を聴きながら弾くよう、注意をなさいました。このことは先生のレッスンを受けられました卒業生の方なら、多かれ少なかれきっと思い当たることと思います。

先生のこのように大変繊細で、熱心な御指導は、フェリス短大音楽科設立以来、ご自分の御健康を害されてまでも、全身全霊をささげられピアノ教育に打ち込まれて、フェリスの為に御力を尽くされました。このような熱意あふれた御指導に対し、深く感謝致しますと共に、心より先生の御冥福をお祈り申し上げます。

「大宮真琴先生の御魂に捧ぐ」

岩谷 紀子 (11回)

5月14日、大宮先生が、腫瘍癌のため、お亡くなりになられた。朝刊で訃報に接し、呆然としていたところに、楽理科の先輩から連絡の電話を頂いた。千葉の病院で、手術を受けられ、数日後、御容態が急変し、帰らぬ人となられた。私は、先生が、このような御病気で臥していらっしゃることなど誰ほども知らなかった。もう一度お会いしておきたかった、との思いで胸が一杯になった。「そのうちに、先生をお訪ねしましょうね。お庭に梅が咲く頃がいいから」などと、友人たちと話しながら、それを果たさずにいたのが、とても悔まれた。去年の暮、「お爺さんとお婆さんになりました。(70才と65才)でも、元気です。」と書かれたお便りと出版なさったばかりの「ピアノの歴史」(音楽之友社)を送って下さった。

それなのに、こんなに早く、お別れの日がやってくるとは。

ご葬儀は鎌倉のご自宅で行われた。お住いは、新緑に覆われた山にいだかれるように建っている。山の向こうは、もう、北鎌倉になる。鎌倉駅からの道も、まわりの併走も、30数年前、私が学生だった頃と殆ど変わっていない。岩を穿った隧道をくぐり抜け、海藏寺を左に見ながら、更に、細い道を行く。やがて、ご門が見える。ご門を入り、石段を一步一步登って行く。

警笛しながら、レッスンに通った懐かしい道。

突然、上の方から、音楽が聴こえてきた。洋館の書斎の開け放たれた窓から、いつも音楽が流れていたあの頃のように。ハイドンの交響曲、第63番、「月の世界のシンフォニー」。見上げると、演奏者の方々の姿が、お庭の木蔭に、チラチラと見える。先生が音楽監督をしていらした東京ハイドン合奏団の追悼の演奏。

先生は、月の世界で、嬉しそうなお顔で、聴いていらっしゃるのだろう。いくつかの弔辞のあと、奥様のピアノで、次女の里絵子さんが、モーツアルトのオーボエ協奏曲、第2楽章を演奏なさった。悲しみに堪えて演奏なさるその響きは、静かに谷を渡って行く。先生は、お家の内で、奥様やお子様たちの演奏をお聴きになるのが一番の楽しみだった。やがて、ハイドンの交響曲、第45番「告別」が流れる中、先生の棺は山を下った。前夜の雨で、あたりは、一層鮮やかな緑だった。リスが枝を走っていました。先生は、この届谷(おおぎがや)のお宅を、どんなに愛していましたことか。葬列の中には、奥様の姿は見えない。奥様の深い悲しみが、うかがわれた。最後に、長女の里麻子さんが、父親への尊敬の念をこめて、しっかりと、挨拶された。

先生は、1951年、創立間もないフェリス短大の音楽科に、今は亡き三宅洋一郎先生に請われて、助手として来られた。まだ東大の大学院生だった。それから10年余りをフェリスで過ごされた。後、成城大学を経て、1963年、お茶の水女子大学に移されることになるが、フェリスにいらした頃の先生は、新進気鋭の音楽学者としてスタートされたばかりだった。情熱のこもった講義一つ一つが懐かしく憶い出される。当時、楽理を専攻する生徒は、学年一人か二人だった。殆んど一対一の贅沢な授業だった。人数が少ないので、大宮先生を中心にして、楽理を専攻する上級生、下級生が親しく交流することが出来た。先生のお宅に向って勉強したり、先生の愛車で、ご家族も一緒に、ドライブにつれていって頂いたりした。軽井沢に家を借りて、夏を過ごしていらっしゃるところに、皆で押しかけたりもした。「あの頃、主人は、学生さんと素直に、楽しんで付き合っていた。あの頃が一番楽しかったのよ。多摩動物園に行って、つくしんぼを取ったのを思い出すわ。」と奥様は、おっしゃる。お茶の水女子大学で27年間過ごされ、定年を迎える。その後は、沖縄県立芸大で、新しい理想をめざすお仕事に意欲を燃やしていました。先生は、音楽教育の現場での活躍も大きいが、一方、ドイツのケルンにあるハイドン研究所の理事を務められ、ハイドンの楽譜の校訂や作品研究で大きな業績を残されている。又、東京ハイドン合奏団を指挥し、演奏活動もされた。

目を細めた先生の笑顔は、やさしく、きっちと話される低音のお声は快い。けれど、その語り口は、理路整然として、隙がない。

1990秋、何年振りかで、フェリスで講義をして下さいました。演題は、「ベートーヴェンの第9交響曲フィナーレ」であった。トスカニーニの、81才の時の演奏を聴きながら、スライドを使って曲を分析された。先生の長年の研究の成果である「総合的様式分析の方法」を駆使し語られた。作品の構造が、くっきり浮び上がり、緻密で、冷徹な目で事物に迫ろうとなさる先生の姿勢が余すところなく、うかがえた。

又、先生は、とても感性豊かな方であった。遺著となつた「ピアノの歴史」一楽器の変遷と音楽家のはなしは、人生を共に歩めたピアニストの奥様に捧げられた作品に思えてならない。先生、やすらかに、やすらかに、お眠り下さい。

支部だより

● 北支部

支 部 長 佐久間真理子 (16回)
副支部長 福井直美 (20回) 平岩由美子 (24回)
北海道連絡所 工藤羊子 (30回)

昨年、北海道、東北に「北支部」が発足しました。11月23日、仙台のホテルメトロポリタンに、同窓会長大島君子先生、学部長芳野靖夫先生お二人をお迎えして、最初の同窓会が開かれました。

音楽に対する強い情熱と深い愛情を持ち続けていらっしゃるお二人の先生方と有意義にお話も弾み、とても楽しい時間を過ごすことができました。

今まで、東北、北海道に点在して住んでいる私達は、同窓生とのつながりは全く無い状態が続いていましたので、もっと早くお知り合いになっていたら、と思いました。私達の卒業後、フェリスは増え人気の大学になり、優秀な学生さんが、全国から集まっている様子を知り、大変嬉しく思いました。

久しぶりに昔の面影を残す皆様方とお会いして、何十年という時の流れを感じながらも、同じフェリスに学んだ、という説明のいらない安心感、親しみでいっぱいになりました。懐石料理をいただきながらのなつかしいお話を盛り上がり、今後の活動の相談をするところまでは発展できませんでしたが、これからFグループとしてのジョイントリサイタル等を計画することができたら良いなあと思っています。

卒業して年々、増え音楽が好きになり勉強を続ける良い目標になるような機会を支部の中に作ることができたら嬉しいことだと思います。

発足したばかりの北支部は、東北6県と北海道という広い地域に渡っており、様々な困難もありますが、会員同志、本当に楽しかったフェリス時代のあの頃に戻ったような交流を続けながら、お互いの今後の活動のために協力し合えるような関係でいられた素敵なことだと思っています。

平 岩 由美子 (24回)

● 中部支部

支 部 長 峯沢絢子 (14回)
副支部長 服部幸子 (20回) 牛込まり (25回)
会 計 石原友子 (34回)
ジュニア・シニアコンサート委員
都築典子 (23回) 大庭千恵美 (25回)
堀谷恭子 (36回)

今年も例年通り、6月9日に名古屋伏見にあります、ザ・コンサートホールにおいてFグループふれっしゃコンサートを開きました。今年卒業の若い3人と、大学から気持ちよくかけつけてくださった芳野靖夫先生で、フェリスらしいコンサートになりました。新人演奏会が終わったらばかりの人、これから留学予定の人など卒業生の活躍ぶりが目立ちます。たまたま今回出演してくださった方達が名古屋市内にお住まいでの事もあり、前回よりいく分お客様が少なかったようですが、まず良いコンサートだったと思います。芳野先生は、この日のために選曲してくださり、ホールの照明も曲に合わせて演出し、「さすが」というものでした。新人の卒業生の出来に目を細めてくださる……何と力強い事でしょう。このフェリスらしさが、いつまでも続くのを願ってやみません。

そして、今回コンサートのお手伝いをしてみて、いかにいろいろ大変かということがよくわかりました。今まで、すべて峯沢支部長におまかせしていたのですが、本当に御苦労の多い事だったと思います。新聞社にかけあってコンサートを紹介してもらったり、音楽科のある高校にポスターのお願いやチケットのお願いに伺ったりいろいろな方面の方に御協力を頂いて初めて“かたち”になっていくのだとつくづく思いました。フェリスらしくしたい、あまり評判の悪いコンサートにしたくない、だ

からといって大赤字でも困ります。出演する方達にも協力して頂いて初めて成り立つのです。何かと大変だとは思いますが、こここのところを御理解いただけすると助かります。

コンサートひとつにしても、やはり同窓会の力は大切です。同窓生の皆さん気が持ちよくお手伝いくださる同窓会であれば、入学を考えている人達にも良い影響を与えると思います。フェリスで良かったと、いつも思えるような同窓会でありたいと思います。一步譲って人の言いたい事を聞いてみる。人の立場になって考えてみる余裕があれば、いわゆるオバタリアンにもならずすむと思います。

秋のコンサートの準備も進んでいます。みんなで作るコンサートという意識を持って下さい。そして、いいコンサートにしたいと思います。ふれっしゃコンサートをお手伝いして感じた事を書いてみました。

牛込まり (25回)

● 関西支部

支 部 長 井上鞠子 (7回)
副支部長 田嶋靖子 (10回) 富士森恭子 (10回)
会 計 平田孝子 (16回)
書 記 千 明子 (18回)

昨年発足したばかりのFグループ関西支部の第2回同窓会は、昨年と殆ど同じ日に(7月30日)、同じホテルの(新大阪ワシントンホテル)、同じ中華料理店で行われました。1月の阪神大震災のため数か月の間、神戸を中心に関西は空白状態、半年を過ぎた今、やっと正常さをとりもどした感があり、同窓会の企画に変化をもりこむ余裕もなかった、というのが正直なところです。

今回の参加者は7~18回の卒業生を中心に11名。地震関係の暗い話題に傾き勝ちな中で、御多忙中横浜から御来阪下さいました副会長・中田幸子さんの明るい雰囲気が救いとなりました。また、同窓会本部より御丁寧な「地震御見舞い」を関西支部に賜り、一同感謝致しております。昨年も経験したことですが、フェリスの皆様との集いでは、会が始まってしばらくすると部屋の中に独特の温かさが広がり、時間が早く流れるように感じます。

今後の関西支部の活動について中田副会長より「新卒業生のジョイントリサイタルでも開いてはいかが?」と御提案頂きましたが、関西には大阪・京都の周辺に音楽大学が多く、残念ながらフェリスに進む人はまだ少ないようで、今しばらく様子をみる他ありません。せめて来年はもう少し良い季節に、全食と有意義な研究会を組み合わせてみたい、と皆で話し合ったことでした。

「現在のフェリスの先生についてもっと知りたい。」との希望も出ていますので、もう少し関西支部の土台が固まるのを待って「先生方のコンサート」でも開催できれば、と夢見ております。

また、関西支部は近畿地方を軸に、中国、四国地方を

～ Tea Time ～
プログラム
三宅春恵先生をお招きして
歌とお話

I 子供の世界
しゃほん玉
ぞうさん
めだかの学校
サッちゃん
どんぐりころころ
いぬのおまわりさん
夕焼小焼

II 横本国彦の世界
母の歌
お菓子と娘
薔薇の花
お六娘

III 楽しいお話

IV Tea Time

1995年8月1日(火) 15:00~17:00
主 催 フェリス女学院大学音楽学部同窓会
場 所 山手校舎5号館 541教室

含んでいますので、この広い地域をどのようにまとめるかが、今後の課題のひとつといえるでしょう。

東京に次いで、音楽活動の盛んな大阪にあって、Fグループ関西支部が独自の充実した活動を続けられますよう願っております。皆様の率直な御意見、御希望などを役員までお寄せ頂ければ幸いです。満2才までしっかり歩行訓練をして(?)来年はもっと具体的な支部便りをお届けできますよう努力致します。

田 間 靖 子 (10回)

● 九州支部

支 部 長 田村淑子 (8回)
副支部長 江口玲子 (14回) 牛島惇子 (19回)
会 計 佐竹悠子 (11回)
書 記 永松真世 (24回) 村上京子 (24回)
幹 事 上瀧享子 (23回) 伊藤和子 (24回)
小野直子 (33回) 安達桃子 (37回)
演奏会実行委員 安波裕子 (24回) 伊藤和子 (24回)
小野直子 (33回)

九州支部では、いままで同窓会の折にミニコンサートを3回ほど行ってまいりました。

今年は、同窓生の活動の場の一つとなっていかれれば良いかと……そして、外部の方たちにも聞いていただきたいと思い、当支部主催の第1回Fグループコンサートが、7月8日(土)、あいれふホールで催されました。天候にも恵まれ、場内一杯のお客様をお迎えすることが出来ました。

プログラムは、安達桃子(37回卒)さんのピアノ独奏、真弓喜代子(42回卒)さん、真弓由喜子(43回卒)さんのピアノ連弾、福泉勝栄(37回卒)さんとフルート独奏、安波裕子(24回卒)さんの伴奏で平井美智代(31回卒)さんのソプラノ独唱と、みなさんフェリス女学院で音楽を学んだ、晴柔らしい演奏でした。また、特別出演下さいました、音楽学部講師、藤村俊介先生と吉田雅子(15回卒)さんのパートーザンのチェロソナタは、コンサートに花を添えました。

今回は、演奏後にミニパーティも行なわれ、出演者の皆さんとの交流も深まり、大変好評でした。

この会を機に、更に前進して参りたいと思っております。今後共、皆様の暖かい御支援と、御指導をどうぞよろしくお願い申し上げます。

梅木 美千代 (26回卒)

真夏の太陽が焼々とぶりそぐ8月1日、山手校舎541教室において、三宅春恵先生をお招きしてティータイムコンサートが行われました。この日は故三宅洋一郎先生の昇天記念日でもあり、まず最初に全員で黙祷をささげました。続いて、春恵先生の楽しいお話を歌が始まりました。先生の表情の豊かさに、会場はどっしり笑いの潮になりました。なごやかなムードの中、時間はまたたく間に過ぎてしまいました。

近ごろは立派なホールもたくさんてきて、コンサートの数といったら膨大なものですが、久しぶりに心が温まり胸にじんしみ通る歌のコンサートを聞いた、という感じでした。

洋一郎先生がご尽力下さったこの校舎で、今日この日、同窓生の皆様と共に有の時間を持つことができましたことに、感謝いたします。



= 慶 祝 =

1995年3月 中田喜直先生
NHK放送文化賞受賞

= 同窓会連絡会 =

高校(白菊会)、大学・短大(りてら・りべるて・Fグループ)の各同窓会の連絡機関で、分担金年額5万円により、各会の交流と共同催事を行う。

現在は、クリスマス礼拝を例年の行事としているほか、随時研修会などを開催している。

[ご案内]

フェリス女学院同窓会クリスマス礼拝

○日 時 12月9日(土)午後1時

○場 所 カイバー記念講堂

○説教者 上星川教会 太田愛人牧師

同窓会連絡会主催のクリスマス礼拝は、今年で7回目を迎えます。今回は中高の生徒さんによるハンドベルの演奏もありますので楽しみにしていて下さい。

尚、昨年の第6回同窓会クリスマス礼拝における献金(218,000円)は、日本医療伝道会、日本キリスト教海外医療協力会、日本ユニセフ協会、日本赤十字社に贈りました。

= 連絡会 会計報告 =

(1994.6.1~1995.5.31)

(単位:円)

収入	前年度繰越金	469,525
	連絡会費(各セクションより)	200,000
	白菊会より義援金として	500,000
	利 息	964
	合 計	1,162,489
支出	故 三宅洋一郎短大名誉教授へ生花	20,600
	祝儀(東京、関西、九州支部)	30,520
	クリスマス礼拝開連費	72,962
	阪神大震災義援金 (送金先 日本赤十字社神奈川支部)	1000,000
	合 計	1,124,082
来年度繰越金		44,407

◆他に共有財産(三菱信託銀行)

貸付信託に 1,500,000円
金銭信託に 189,552円
合 計 1,689,552円

= CDのご案内 =

田 開 靖 子(10回)
"ゼザール・フランク ピアノ作品集" ¥3,000.-
(お問い合わせ 山本めぐみ)

齊 藤 京 子(34回)
"愛の庭" (フランス・ドイツ・イタリー・日本歌曲
をあつめて) ¥3,000.-
(お問い合わせ 音楽出版ハビエコー
Tel.03-3584-6470)

= Fグループジョイントコンサート =

○日 時 11月10日(金) 午後6時30分

○場 所 フェリスホール

○出演者 西山智恵(44回) ピアノ

増田明子(43回) 作曲

小瀬美穂(42回) 声楽

工藤羊子(30回) オルガン

○入場料 2,000円

○主 催 Fグループ

今回は、特別出演としてチュロ藤村俊介先生、ピアノ黒川浩先生の演奏もありますので、皆様お誘い合わせの上、是非いらして下さい。

◆ ジョイントコンサート出演者募集について

ジョイントコンサートへの出演は、原則として本部、中部支部、九州支部共、Fグループ会員で、担当の先生の推薦のある方に限ります。尚、希望者多数の場合は、書類選考させて頂きます。募集期間などについては、各支部にお問い合わせ下さい。尚、本部、中部支部は毎年、九州支部は3年に一度、コンサートを行っております。

〔ジョイントコンサートのお申し込み先〕

本 部: 大坪悠子(15回)

中部支部: 峰沢綾子(14回)

牛込まり(25回)

九州支部: 田村淑子(8回)

関西支部: 井上絢子(7回)

北 支 部: 佐久間真理子(16回)

= 後援について =

◆ 演奏会関係

演奏会の後援については次のように定められています。

- 1) 同窓会は常に向上心にあふれた会員の演奏会を後援する。
- 2) 後援はフェリス女学院大学音楽学部同窓会関係者(同窓生、職員他)を対象に行うものとする。
- 3) 後援の依頼は所定の用紙に記入の上、演奏会の2ヶ月前までに執行委員に提出すること。
- 4) 後援の許可は役員会に諮り決定され、「後援、フェリス女学院大学音楽学部同窓会」と記すことができる。
- 5) 上記以外に関しては、その都度役員会で決定する。

〔Fグループ後援演奏会のお申し込み先〕

執行委員: 大坪悠子(15回)

◆ コンクール関係

Fグループ会員の方が国内外のコンクールに入賞されましたら、委員までご連絡下さい。

〔連絡先〕

書 記: 東海林裕子(20回)

—「Fグループ後援演奏会」—

('94.9 ~ '95.7)

1994. 9.30 八木英子(5回) + 大島君子(3回) ジョイントリサイタル
だいしホール

10.13 大島君子ピアノリサイタル(3回)

共演 三浦章宏(VI)、藤村俊介(VC)

サントリーノホール

11.15 斎藤定子メゾソプラノリサイタル(12回)

共演 安藤友侯

富士市文化会館ロゼシアター

11.17 江口元子メゾソプラノリサイタル(4回)

共演 ダルトン・ボールドウィン

サントリーノホール

1995. 3.26 川村よしみジョイントリサイタル(38回)

共演 増矢馨子

鎌倉芸術館小ホール

5. 3 田中真理ムゼウム室内楽コンサート(24回)

共演 逢田清重(VI)、茂木新緑(VC)

ムゼウム・ハウスカスヤ

6. 9 土佐織フルートリサイタル(40回)

共演 細川順三(FL)、高須亜紀子(pf)

ウォーリーズホール

7. 2 島田美智代ソプラノリサイタル(31回)

共演 萩野美紗

岡山県立美術館ホール

7.14 チェロと三人のピアニストによるデュオコンサート

熊本美也子(17回)、谷口直子(26回)、

日野智子(34回)

横浜美術館内レクチャーホール

1994年度 Fグループ会計報告

(自 1994年5月1日 至 1995年4月30日)

収入の部	(単位:円)
終身会費	3,800,000
募金委員会より	438,093
総会関係	412,000
ジョイントコンサート関係	438,000
事務関係	65,840
定期解約	10,000,000
銀行利息	228,633
小計	15,382,566
前年度繰越金	13,389,750
合計	28,772,316

支出の部	(単位:円)
学年幹事会関係費	74,237
総会関係費	652,517
同窓会援助金関係費	350,999
リサイタル後援関係費	181,321
Fグループ会報関係費	393,394
ジョイントコンサート関係費	602,613
慶弔関係費	218,284
活動関係費	170,900
会議関係費	236,772
名簿関係費	53,275
事務関係費	40,482
Fグループ同窓会室基金	20,176,000
小計	23,150,794
来年度繰越金	5,621,522
合計	28,772,316

繰越金明細書	(単位:円)
貯蓄預金	4,632,482
普通預金	981,623
現金	7,417
合計	5,621,522

= 1995年度 役員紹介 =

会長 大島君子(3回)	
副会長 江原郁子(8回)	中田幸子(9回)
書記 東海林裕子(20回)	黒滝貴代子(20回)
会計 齋藤令子(11回)	小林周子(29回)
会計監査 中島恭子(9回)	熊取谷寿子(16回)
執行委員 大坪悠子(15回)	佐々木あつみ(22回)
常任委員 西葉子(15回)	吉川慶子(15回)
	西山陽子(38回)
会報 田中薰(25回)	斎藤美佐子(39回)
	山本めぐみ(36回)

編集後記

Fグループ会員のみなさま、お元気ですか。秋の訪れと共に会報24号をお届けします。

ここ数年を振り返りますと、学校の為に御尽力下さった先生方の御逝去の何と多かったことか……、謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

又、昨年新支部が発足したことにより、同窓生は、北は北海道から南は九州まで日本のどこにいても、Fグループの活動に参加できるようになりました。各支部がこの一年間何をしたか、興味深いものがあります。ぜひお読み下さい。

最後になりましたが、中島学院長をはじめ、お忙しい中原稿を執筆して下さいました方々に、お礼を申し上げます。(Y)